

熱

水野 仙子

民子^{たみこ}はほつかりと眼を開いた。瞼^{まぶた}がさうして自然にひらくやうなことはめつたにないので、自分ながらそれを怪しむものゝやうに、枕をきしませて民子はそのらを眺め廻してみた。後向きになつてゐる夫の襟足に目をとめた時、民子^{たみこ}は一寸の間息^まを殺してその寢息^{うかじ}を窺つた。まだ寢入つてゐるのらしかつた。いづれにしてもそれは珍しいことであつた。自分でも困つてゐるほど目覺めの早い夫が、今朝に限つて寢込んでゐるのか、いつも呼び覺まされなければ眼の開^あかない民子が寢足りたのか――枕のぬくみが頭の中いつぱいに浸み込んで、丁度すべての考へが温湯^{ぬるゆ}にでもつかつたやうにぼんやりとしてゐる。點^つけて寢た筈の電氣が消えてゐるのは、もう朝もよつぽど長^たけたのであらう。知らぬ間に體の上半身が搔卷^{なしか}だけになつてゐたほど、生^な暖^{あた}い朝であつた。

『あゝあ……』と民子は退屈^{あくび}さうに小さな欠伸をした。

いつもは、『おい、おい。』と呼び起されて、やう／＼淵のやうな睡りからひきあげられながら、床の
中で一通り新聞に目を通してしまつたり、或はちゃんともう起き出て机の前に坐つてゐたりする夫の
こちらに向けた顔にばかりと目を開くと、極りのわるさを隠すやうに急ににこりとして、なんとかか
とか一甘えあまえるのがお極りであつた。

夫は民子のうつちやつたやうな欠伸に、はじめて肩のあたりを動かしてこちらを向いた。その眼は
今まで眠つてゐたやうにも、またさめてゐたやうにもあつた。民子は黙つてその顔を眺めた。不意に
忘れてゐた夢のことが思ひ泛んだ。

『どうしたんだい？』

夫は不思議さうに、不機嫌なやうな、また眞面目なやうな顔をして自分を眺めてゐる民子を横から
眺めた。

『どうもしないわ。』といつて、民子は夫から眼を外し、眞仰になつて暫くぼんやりと天井をみつめ
た。それはいつでもどうかある時に決つてする返事であつた。

『おい／＼、雨が降るよ。』

暫くすると黙つて靜かに起き上る民子を揶揄するやうに、夫は夜着の襟を髀で押へて聲を掛けた。
民子是一寸黙つてゐた。さうして蒲團の裾のあたりに腰紐をさぐりながら、わざと眞面目に受けた

やうにして、つぶや呟くやうに言つた。

『なんだか馬鹿に生暖かいやうだから、降るのかも知れないわ。』

雨戸を繰りあげると、どんよりとはしないまでも、なんとなくはつきりとしれない空が、この家の目覺めを待ち兼ねたやうにさし入る光りと共に、家の中を覗き込んだ。風は一吸ひの息にもまじつて**や**強く襲ひながら、生暖かく袂を吹いた。たもと庭の隅に打つちやりばなしにされながらも、ひよろ／＼とした枝の先に蕾つぼみを持つた菊が、黄いろく一つ咲きかけた頭をゆらくと揺ゆつてゐる。丁度六月初め頃の、嵐氣あらしけを含んだ風のやうな肌障はださはりが、魔藥でも吹きかけて行くやうに體がげんなりとする。こんな朝はやはり、ぴり／＼とした小言のやうな冷たさが懐しい。霜が降りかけて、なんと思ひかへしたお天氣であらう。

齒並みに磨すりあてる鹽しほの、その僅かな刺戟こころよくを快がりながら、民子は幾度も／＼楊枝の先に食鹽を塗つた。さうした半無意識な心には夢がまぎ／＼と思ひ甦かへつた。――どうしてあんな夢を見たのだらうそんなことはこの頃思つても考へてもゐやしなかつたのに！

すつかり黙り込んでしまつた民子にちらと眼をやつたまゝ、夫は不愉快さうに朝飯の箸を取つた。民子の心は痛んだ。どうしてこの思ひが語れよう？『私はFの夢を見ました！』とどうして言ひ切れようか。それは私自身の良心にも祕めなければならないことなのだもの。

F、F、Fが私に逢ひに來た。私は逃げた。Fはまた變装して私に近寄つて來た。私はあつと叫んで一生懸命逃げた。見事に逃げおはせはおはせたものゝ、その思ひは惱しい。私はたゞ夫への義理、若しくは義務からのみ會ふのを避けたのではなかつたか？ 夢に現はれたその面ざしは、今は如何なる人も見ることの出來ぬ、彼が少年の終りの、あのあどけなく澄んだ眼ではなかつたらうか？ 烙印はいまだに――今は囚人のそのやうに忌はしい――この胸に消え去らなかつたのだらうか？ 考へまいとすればするほど考へられた。悩むまいとすればするほど悩んだ。民子は夫の前にさあらぬ體を装ふ虚偽には堪へられなかつた。二人とも食事は進まなかつた。

風は少しく強くなつて、ことごとと障子を揺るのが、僅かに冬らしい侘びしさをとめてゐるが、目の患ひのやうに熱っぽい空氣が、なんとなく心を重く壓しつける。

夫は間もなくセルの袴をつけて、その日の勤めにと出て行くのであつた。

『いつてらつしやい。』と民子は彈力のない聲で言つて、泣きたいやうな氣持ちでその後姿を見送つた。

夫が出て行くと共に、民子はいくらか良心の重荷が薄らいだやうな氣がした。それと同時に、いろいろな思ひを振り棄てようとするやうに首を振つて、やをら起ち上ると、簞笥の上から鏡臺を下した。根元を手に捌んで、先に縛れた毛を櫛の齒で解きながら、民子はまたいつかものを思つてゐた。これ

といつてもう取り留めもなかつた。やうやくさしかけた日向に背を向けて、いつまでも同じところを繰りかへし／＼梳くしけづつてゐた。

あの人はもう私達のこの隠れ家を知つてゐる。それは一月ほど前のある日——と民子は思ひを廣ひろげて行つた。民子がお針をしてゐる座敷の縁先に、しのびやかな草履さうりの音がして、近い所に住んでゐる友達の當惑したやうな顔がそこに現はれた。

『わたし、困つちやつて——Fさんが今家に來てらつしやるのよ。尋ねたいことがあるから歸りにあなたのところにお寄りするつていふのよ。わたし、あなたを呼んで來るからつて出て來たの。』

この友達は民子の苦しい立場をよく知つてゐた。民子は轟とじろく胸を隠して凝じつ乎と友達の顔を見つめた。

『わたし、隠れるわ!』

『だつて、どこに?』

『わたし出て行くわ、後生だからあなたわたしがゐなかつたつてさういつて頂戴。』といひ／＼、民子は今にもすぐにその人がそこに見えでもするやうに慌てゝ、前掛けをとつて羽織をひつかけた。

『だつて若しこゝにお寄りしたらどうするの?』

『まだ歸らないことにすりやいゝぢやないの。』と民子は一も二もなくその再會を避けようとした。

『ぢや早くなさいよ。』

『すまないわね、勘忍して頂戴よ。』

民子は自分のことからこの友達に嘘をつかせるのが心苦しかったので、詫びるやうにまた願ふやうにその顔を見た。

民子はそれから二時間ばかりの間、寂しい林の中をさまよつて過した。さうしてなんとなく家へ歸るのが恐ろしかった。

その日民子の脱け出た部屋には、縫ひかけの袷が取りひろげてあつて、赤い絹裏が硝子を透してさし入る日光に華やいでゐたであらう。Fはその留守に訪れ、さうして原のあたりを一廻して來てからまた訪れ、脱殻の家内に應へがないのを知ると、あの友達の家に一寸言葉をかけて元氣よく歸つて行つたさうである。

あゝ何にも知らないのだ！ この家庭に永久に消えない一つの影となつてゐることも、この二人の愛の歴史に、拭ひ去ることの出来ないしみとなつてゐることも！

民子はふいと無意識に鏡の中をのぞいた。と搔き下げた髪の下から窺ふやうに、自分をのぞいた自分の顔にぎつくりして、民子のはらりと毛を握つてゐた手を放した。そこには憎むべき女がある。憎むべき女がある！

生ぬるく吹く風は懶く髪の毛を拂つた。民子はすべての考へを忘れ去らうとするやうに、起つて縁

側の柱に寄りかゝつた。その時^{くちびる}唇をひらいて出たのは心覚えの讚美歌であつた。それは悲しい心を遣^やる時なぞに、思はず歌ひ出すのが民子の癖なのであつた。

思ひいづるも恥づかしや

ちゝのみもとをはなれ來て

あとなき夢のあとをおひ

むなしき幸^{さち}をたのしみぬ

ならはぬわざの牧場守り

くさのいほりの起きふしに

人のなさけのうすごろも

浮世の風ぞ身にはしむ

破れしたもとにおく露も――

民子の聲は次第々々に慄^{ふる}へて行つた。それもやがてはつたりと消えた。涙がほろ／＼と頬を傳^{つた}はつた。歌の調子の哀しげにしめつぽいのが、民子の心の奥に潜んでゐた譯もない悲しみを誘ひ出したのであらう。せきあげるために切れて戦^{おの}く歌の詞^{ことば}は、いよく悲しさに咽^{むせ}んだ。けれど涙はかへつて民子の爛^{ただ}れた心に快かつた。

あゝ！ 何故憎めないのだらう！ 憎みます、憎みます、自らの過失と共に私は彼を憎みませう！
と、その時ほと／＼落ちる涙を積みながら誓った自分が、なほ憎み切れぬ悩みは、かねての覺悟を夢に裏切られた今、懊惱あうなうとなつて再びこの胸に甦よみがへつたのか。何故かう悩ましいのだらう？ 何故かう悩ましいのだらう？

考へても／＼、思つても／＼、答へはたゞ一つであつた。それは如何なる式によつても同一の答へであつた。自分は今この世に於ける誰よりも夫を愛してゐる。いや／＼その比較などは愚かしいほど絶対に愛してゐる。それは事實であるし、また眞實ほんとうでもある。更にその上に私はまた彼を思つてゐるのだらうか？ 愛してゐるのだらうか？ あゝ、それはとんでもないことだ！ それならばなぜかう悩しく苦しいのだらう？ Fがさも私を慕つてゐてくれるのでもあるかのやうに、逢ひに來た夢などを見たりして、まあそれは私の心の反映ではなかつたかしらと、恐ろしくも恥づかしい。どうしたらばこの煩はしく纏まつはる思ひから遁のがれることが出来るだらう。この悩ましさを拂ひ退けることが出来るだらう？

せめてはこの心のありのまゝを人に語ることが出来たならば、或は譯もなく素通して行く思ひであるのかも知れない。それでは誰にそれを聞いて貰はう？ それは夫より外にあるべき筈はないのだ。それが出来ようか。それが出来ようか。完まったき愛、一分の隙もない愛を自分に望んでゐるあの夫に、さ

うしてあのことの爲めにひどく神經過敏になつてゐるあの人に――。それはたゞ自分の愛を疑はれ、夫を不快にし、いやが上にもFを厭はせることより外に役だたないのだ。それではF――におゝ！なんといふそれは恐しいことだらう！私はもはや決して彼には逢はないであらう。たとひどのやうな魔が私に魅り、私が彼を思ひ、彼を愛し、彼のために生甲斐を感じるやうなことがあらうとも（それは萬が一にも決してないと信じてゐる）私は決して彼には會はないであらう！

民子は縁先から草履をはひて、こだわつた氣を散らさうと試みるためにぶらりと門を出た。足はいつものやうに原の方へと向いてゐた。

耳の根元を掠めて吹いて行く南風は、騒々しい樹々のざわめきを右から左へ、前から後へと流して一頻りく、はらくと黄色い木の葉が道に降りかゝる。時たま照りかゝる日は、身につけた青さをふるひ落した落葉樹の樹の間を通して、一繁りの叢に櫨の紅葉を眞紅に透かしてゐる。

人氣のない方へ、人氣のない方へと、民子はつひにこつそりと御料林の中へはひつて行つた。無闇に人の手のはひらぬところだけに、小道の奥の松の樹の間はほの暗く、枯れた萱の一むらぐが、一様に小腰をかじめて、野を一面に靡き流れる。枯れかけた芝草は、丁度中年者の白髪のやうに、まだ青々とした草と入り交つて、踏まれるたびにさらくと草履の下に鳴る。風は勢ひをゆるよめうともせず強く吹いた。

目の前に不意に起つた草擦れの音と人影にぎよつとして民子が顔を擡げると、一人の草刈り男が、一團の枯草を背中に積んで、さや／＼とあたりに音を立てながら民子の前を横切つて行つた。その姿はやがて崖を下りて、叢のかげの細道へと隠れ去つた。

民子は一本のひよろりとした松の樹の下に、小綺麗な芝生の座をみつめて、そこに兩足を投げ出しながら背を幹に凭せかけた。風が一度りするたびにその樹はゆら／＼と揺れて背中に動いた。小鳥が低く飛んで後の叢の中に隠れると、風の絶え間は一頻り近間が静まつて、遠くの松風の音がごうごうと漂うて来る。

どこぞに荷を下した草刈り男は、再び民子の前を通りかゝつた。

『ひどい風ですな。』

それは思ひもかけぬ挨拶だつたので、民子は吃驚して振りかへつた。

『え？』

『ひどい風ですな。』

民子は恐ろしさに胸がどき／＼するほど驚かされたのであつた。

『あんたどこさ行くんです？』と草刈り男は猶も馴々しく問ひかけた。その言葉は不思議にも民子の耳に馴れた調子のものであつた。

『いゝえ、どこへもいきあしないの、たゞ遊びに來たの。』

民子は猶も用心したやうに、強ひて何氣なさを装つてその男を眺めた。

『はあ、遊びに來たんけえ。わしはね、娘が來たのかと思ひました。わしにも丁度二十四五になる娘があるんでね、なに、こんなとこさ來る譯も何もねえんだが、やつぱり子供を持つてやすとね、ふつとそんな途方もねえことも考へますでね。』

民子はつくぐとこの不思議の男を眺めた。なるほどさういへばもう可なり年もいつてるらしく、古いパナマの帽子を風に取りられぬやうに髻あこで結び、二つの腕にきつちりした襯衣しやつの上に、兩袖のとれた古羅紗の破れた洋服の身だけを着込んでゐる。畏かしこまつたやうに股引の膝について民子の前に坐つた背中の丸さが、如何いかにも樸直ぼくちよくらしく、珍しく立派な髻ひげを貯へてゐるが、それはこの男に威嚴を添へるよりも、却て何處か間のぬけた感じを與へるのであつた。

民子はその素朴な心から自然に流露りうろした、その親の情がこの上もなく懐かしかつた。

『その娘つていふのはここにゐるの？』

『いゝや、故郷こくにに居りますで。娘が總領で外に男の子が三人あります。わしは仙臺せんたいざい在から來てやすだが、どうもこの節の不景氣で、はあなか／＼歸られやせん。金は持たなくつても、せめて身なりだけでもこしらへてからと思ひやしてな、この檻樓ぼろを着てはまさか歸られもしず、來年はとは思つてや

すが、それもかう不景氣／＼ぢやどうも………。』

風に吹かれて細める彼の眼尻には目脂めやにが溜つた。どこやら聞き覚えのある調子だと思つたのは、民子の故郷とは國が近かつたからである。

蝗いなでが一つひよいと飛んで、小さな草の葉裏にくるとかくれた。民子はそれを捕らうとして手をのばした。すると蝗は巧みに逃れて、また二三歩先の枯草にその背の色を隠さうとあがいた。そしてはまた飛び上つた。つひに民子は彼の投げ出した鎌の近くにそれを捕へることが出来た。

その子供らしいしぐさを黙つてみてゐた男は、溜息をつくやうに一つ大きな息をして起ち上つた。

『子供たちは今頃どんなことをしてますかなあ!』

彼はさうしてすた／＼と草原の方へと歩いて行つた。

民子は蝗の口に草の莖くきをつき込んだり、兩肢りやうあしを押へて體操たいさうのやうなことをさせたりして、暫くはいろ／＼な雜念を忘れてゐた。ふと何かの考へに襲はれたやうに、氣がついてあたりを見廻すと、まぢり／＼と樹の間からさす日影に、ぱつと小鳥の姿が横切つて行つた。その鳥影は不思議な寂しさを民子の心にとどめた。漸く自由を得た蝗は、辛からじて一莖の草に縋すがりつくつと、暫く休息の身繕ひをして、やがて次から次へと草を飛んで行つた。

急に人懐かしい氣が迫つて來ると共に、民子はすぐに今の草刈り男を思ひ泛べた。この廣い／＼草原

の中にたつた一人世の中から取残されたやうに口をつぐんで、終日草を刈つてゐる男の思ひは、遠く故郷に残して來た妻や子供の上にさまよつてゐたに違ひない。ある時はその旅稼ぎの現在を忘れ、ある一時は忘我の境に娘の運んで來るお茶を待ち兼ねたであらう。その時不思議にも自分の方をさしてこの野を一人の女が歩いて來る。彼のまぼろしはその瞬間に生きた。彼はまさしく白晝の夢を見たのだ。

民子はなんとなく彼の老人を慰めてやらなければならぬやうな氣がした。松の根元を起つて、彼の姿の隠れた方へと、目に見えぬほどの傾斜を芝草に添うて上つて行つた。さや／＼と風に流れて行く草の波の中に、一つの黒い塊りが靜かに動いてゐる。小松や、ものゝ切り株やを選び避けながら、なるべく眞直ぐにとその方へ近づいて行くと、やがてさ／＼といふ手鎌の音はつきりとして來る。彼の後の刈り跡に残されたバケツの中には、濁つた磨ぎ水が靜かに澱んで、それに雲の一部分が寫つてゐた。民子は近づいた。

『あんたの娘の名前はなんていふの？』

風は言葉を攫つて行つた。彼は靜かに腰をのばして民子を眺めた。

『佐藤勝之助といひます。』

『いゝえ、娘なの。』

『娘ですか、娘は初代はつよつていひます。』

彼は丁度戸籍吏にでも答へるやうな調子で言つた。

『さう、いゝ名だわねえ。』

『はあ、二十四になります。嫁かたづいて子供もあります。』

さういふかと思ふと彼は順序もなく、好い娘だといつて村から褒められたことや、製絲場に出てゐて成績のいゝことや、まだ成人をしない子供達のことや、彼が村の名や郡の名などを、ぽつり／＼と話し出した。

風が強いのと、しまひにはだん／＼呟くやうになつたので、民子にはすべてを聞きとることが出来なかつたけれど、民子はさもそれに聞き入つてゐるやうな風を装うてゐた。それがなんとなくこの男を劬いたはるたゞ一つの方法であるやうな氣がしたので、利鎌とがまに薙ながれて根を失ふ草は、絶えず風に煽あふられて彼の勞力と共にあたりに飛び散つた。

民子は豫期しなかつたこの慰めに、心持ちはいくらか落着いてゐた。しかしその底にはなんともいへぬ寂しさが流れてゐた。日はかげつてしまつたけれど、ぼや／＼とした空氣が痛いほどあつく熱をもつてゐる眼の下あたりに觸れるたびに、ぞく／＼と寒氣が全身に傳つたはるのを覺えた。

民子はぼんやりと地面ちべたをみつめながら、家の方へと歩いてゐた。知らぬ間に空虚うつろになつてゐた胸に

は知らぬ間にさまざまな思ひが、丁度満潮のやうにひた／＼と押しよせてゐた。民子は夫を思ひ、又Fを思つた。さうしてその二つの思ひを兩立させることに、不思議にも先刻のやうな苦痛はなかつた。彼女の反省の油斷をみすまして忍び入る魔は、彼女の良心を快く麻痺させ、彼女の胸に夢想を描くべく働いた。民子は今その道で圖らずもFにめぐり逢ふやうな豫覺さへされた。妄想はすべての不自然や罪を蔑にした。さうして民子自身は決して刻々と密かに進んで来る異常な發熱を意識しなかつた。

夕方になつて風は止んだ。惱ましかつた彼女の一日も暮れて、夢のやうな朧ろさに夕暮れが來ると、淡い宵星が一つ靜かに空に光つてゐた。

夫は月影を踏んで歸つて來た。西洋菓子のはひつた小さなボール箱を下げてゐた。

『どこの？ まあウキンナの、何誰かといらしつて？』

『いゝや、わざ／＼寄つて買つて來た。どうせ別れるなら、せめて好きなものでも喰べさせようと思つて。』

民子はぎつくりして夫の顔を見上げた。その顔は民子を劬はるやうに、またすべての感情を氷解させたいと願ふやうに笑つてゐたけれども、民子は今は片頬笑みさへすることが出来なかつた。民子はそれを笑戲だとは信じたけれども、また眞實だとも思つた。そしてその瞬間に、自分の頭が眞夜中の

やうにしいんと澄んだやうな氣がした。もはや今はすべてが決まらなければならない。

『いゝ月夜だね、外に出てみないか。』

民子は再び夫の顔を凝^{じつ}乎と眺めた。その一振りにも露が滴りさうなほど、危険に磨^{やいば}ぎすまされた刃のやうに、病的に澄んだ民子の神経は、夫の顔に動かし難いある決意の閃^{ひらめ}きを認めたやうな氣がした。

『今夜！』と彼女は思つた。——それはあの人にしては當然な決心である。あの人^の愛——ひいては二人の身にかゝつた愛を裏切られまいとするには、たゞ一つのその途を選ばなければならない。たゞそれを爲^なし得ると否とは勇氣の問題である。してあの人にはその勇氣がある。今夜こそ私は眞にあの人に満足する。その刹那こそ私は眞にあの人を愛することが出来るのだ。私は莞^{くわんじ}爾として死ななければならぬ——さうだ『今夜！』

民子の胸には忽^{たちま}ち戲曲的なある場面が泛^{うか}び上つた。——それは月夜であつた。靜かに並んでゐた二つの影が忽ちに亂^{みだ}れる——

『堪忍してくれ！ たゞお前を眞實愛するがために！』

胸と胸の間に刃^{ひら}が閃^{ひら}めく。

『私はあなたを愛します！ ほんとうに！ 私はあなたを愛します！………』

一つの影は倒れる。月の光りは青白く、安かに幸福なその女の死顔を照す――。

『一寸待つて下さいな。』

民子は決心したやうな面持ちで、汚れた足袋を履きかへ、羽織を着替へた。さうして差當り氣づかずにあることを探してもするやうに部屋の中を見廻した。彼女は火鉢の前に落ちてゐたさし櫛を拾つた。それから机の上のぬけかけてゐるインキ壺の栓を固くした。赤い小蒲團の上に這ひくしてゐる彼女の人形は、おけしの頭を擡げてにこやかに彼女の顔を見上げてゐた。

今はと草履をつつかけて玄關の敷居を跨ぐ時、ほんの一瞬時ではあつたけれど、すべての過去がはつと民子の胸に反射した。それから彼女は、自分ながら満足するやうな強い足取りで、自分を待つてゐる夫の方へと近づいて行つた。

なんといふそれは月の清い晩であつたらう！ 地上に揺れる樹の影は、恐ろしいほどはつきりと木の葉の形を寫してゐる。道は青白く光つてゐた。すべてのものゝ影は黒かつた。彼女の足の踏んでゐる地、彼女の胸の呼吸する空氣、それが月の世界の聖地そのものであるやうに、たゞ一歩み、たゞ一顧みの動きにも心が用ゐられるのであつた。

遙かな線路の方に當つて、ばかりとシグナルの灯が青にかはる。風が過ぎてさやくと木の枝が鳴る。木の葉の影模様が地に揺れる。――静かだ。

おゝさらば生よ！ 自然よ！

民子の顔色は青白く、冷たく、澄んで輝いてゐた。

その夜の不思議な幻想から、民子は暫くの間現實の自分に歸ることが出来なかつた。民子は熱を病んだのであつた。

【入力者注】

底本は総ルビですが、入力者の判断で一部のみ残しました。

一行の文字数を底本に合わせるために、半角スペースを挿入したりフォントサイズを小さくしたりした箇所があります。

以下の修正を施しました（数字は底本の頁―行）。

117-14 勢ひをゆるめようともし ↓ 勢ひをゆるめようともし

119-9 樸直らしく、 ↓ 樸直らしく、

123-4 夢想は ↓ 妄想は

底本…「文章世界」大正三（1914）年十二月號

入力…小林 徹

公開…令和五年八月八日

[水野仙子「作品年譜」に戻る](#)

謝辞…底本コピーをご提供下さいました菅野俊之様に厚く御礼申し上げます。